安岡章太郎の文學と思想

魏铀原 著

北方文艺出版社

日本当代文学研究丛书之一

安岡章太郎の文学と思想

魏铀原 著

江苏工业学院图书馆
藏书章

北方文艺出版社

图书在版编目（CIP）数据

安岗章太郎的文学和思想 / 魏铀原著. —哈尔滨：北方文艺出版社，2004. 5

ISBN 7-5317-1630-5

Ⅰ. 安… Ⅱ. 魏… Ⅲ. 安岗章太郎—文学研究

Ⅳ. I313. 065

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2004）第 033697 号

安岗章太郎的文学和思想

An'gang Zhangtailang De Wenxue He Sixiang

作　　者 / 魏铀原
责任编辑 / 梁志民　李庭军
封面设计 / 任迪思
出版发行 / 北方文艺出版社
地　　址 / 哈尔滨市道外区大方里小区 105 号楼
网　　址 / http://www.bfwy.com
邮　　编 / 150020
电子信箱 / bfwy@bfwy.com
经　　销 / 新华书店
印　　刷 / 黑龙江省商业厅印刷厂
开　　本 / 850×1168　1/32
印　　张 / 7.125
字　　数 / 165 千
版　　次 / 2004 年 11 月第 1 版
印　　次 / 2004 年 11 月第 1 次印刷
定　　价 / 18.00 元
书　　号 / ISBN 7-5317-1630-5/I·1544

序　文

魏鈾原博士の学位論文が、この度公刊の運びとなったことに対して、心からお慶びを申し上げたい。

魏博士の研究は、現代日本文学のユニークな代表者の一人安岡章太郎研究をテーマとする。安岡章太郎とその文学の詳細は、本書の中で詳しく論述されるが、そのユニークな特質が、魏博士の指摘のように、一つには、その出生に起因していることは間違いあるまい。安岡は、陸軍獣医を父として生まれ、父の転勤とともに、朝鮮京城で小学校入学の後、弘前、東京(青山)と各地を転々と移動し、そのため、勉強にも支障を来すほどであった。

戦前の日本で、陸軍軍人であることは、羨望やあこがれの的であった。しかし、兵科でない医師という位置は、軍隊の中では傍流であり、しかも、獣医となれば、医師の中でも低い位置に置かれた。高い価値を認められる華やかな集団の中の傍流下層というのが、安岡に刻印された生い立ちであり、それが彼の文学を決定する重要な因子であった。

高い価値を独占する集団、社会を主導する中心的集団、そうした集団の中の、傍流下層に属するものの意識の中で、価値高い主流集団に属するものに特有のプライドが共有されることはむろんであるが、そうしたプライド故に、傍流意識、下層意識は、そのプライドを屈折させる。その屈折した意識が、陽の当たる中心

集団の中からは生まれない、きわめてユニークな観察を生み出すことが少なくない。安岡文学の原点は、そうした屈折意識である。

中心集団の中では、傍流下層集団である。しかし、社会全体から見れば、明らかに、中心集団の一構成分子である。そうした逆説的地位が生み出す観察は、きわめて独自である。社会全体の中での、傍流ないし下層集団からは、ストレートな批判的意識が生み出されるのが普通である。だが、中心集団の中の傍流下層となれば、単純な批判的敵対的な意識ではない。中心集団の誇りをまず共有していながら、中心集団の誇りに照らして、いわば情けない状況を痛感するほかない逆説が、そうした意識の特質なのだ。

この逆説的意識は、人間心理の隠された裏面を、次々と暴き出す。その姿は、否定的であるとともに肯定的であり、哀切感の中に諧謔がこめられる。安岡文学の華麗な画面を縁取るアイロニーや、陰鬱な物語の背景に流れる突き放したユーモラスな気囲気などは、いずれもこうした逆説的意識の産物であるといってよいだろう。

ただし、安岡文学の真価は、そうした屈折意識の持つ多様性という点にだけあるのではない。屈折意識はそれ自体、多様な視点を固有するとはいえ、ある社会の中の特殊個別的意識というにすぎない。それは興味深い多面的観察であるとはいえても、それ自体として積極的な意味を持つとは限らない。しかし、それは、集団の中の主流においては、通常意識されることのない集団自体の矛盾や限界などを鋭く剔抉する場合がある。

この矛盾限界の剔抉は、それが社会の主流集団に関わるだけに、それは社会全体の矛盾や限界に触れるのが普通である。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れは特殊個別な観察でありながら、社会の普遍・全体に関わる観察となる。しかも、それが多面的な視点の産物であるが故に、ストレートな激しい批判にありがちな一面性を免れている場合が少なくない。こうした矛盾の剔抉は、特殊個別でありながら、否、特殊個別であるが故に、普遍・全体の問題に肉薄して説得的な場合がある。安岡文学は、そうしたものの実例であり、その真骨頂は、まさにその点にあるといってよい。

魏博士の安岡研究は、こうした安岡文学を解明して余蘊がない。その伝記的研究をはじめ、主要な作品の作品論や、その思想的分析など安岡章太郎と安岡文学についての本格的な研究である。むろん、これまで多くの安岡論が生み出されてきた。しかし、それはいずれも、個別的な作品解説や批評の域を超えるものでなかった。魏博士の、この研究によって、安岡章太郎の生涯とその作品は、一つの統一した視野の中にまとまりある体系としてその全貌が明らかにされている。

この研究が、現代日本文学の自己認識にとって、きわめて大きな寄与を果たすものであることは疑い得ない。のみならず、今、先富から小康の途上にある中国の思想界・精神界にとっても、少なからぬ意味があると思う。中国の現代社会の中では、安岡的屈折が日々生まれるほかないであろうが、その屈折が、社会の混乱を助長するものとなったり、意味のない諧謔や韜晦の中で、思想的エネルギーを消尽させてしまうのでなく、説得力ある普遍的全体的展望へと昇華される道筋を、安岡文学は、たぐいまれな明確さで、はっきりと指し示しているのだから。

岡山大学名誉教授　岩間　一雄

2004年4月8日

目　次

序…… 1
第一章　「郷土」の視点
——『流離譚』の世界…… 6
第二章　弱者の文学
——初期創作を中心に …… 31
第三章　普遍的テ－マへの萌芽
——『海辺の光景』を中心に …… 62
第四章　選別システムと落第者
——『私説聊斎志異』を中心に …… 92
第五章　もう一つの和解
——『アメリカ感情旅行』『志賀直哉私論』を中心に
…… 112
第六章　安岡文学とその政治的スタンス
——『僕の昭和史』を中心に…… 142
結論…… 183
補論一　安岡文学における「差別」について …… 190
補論二　安岡文学における「家系」について …… 203
あがき…… 214

序

中国にいるとき、昭和期の作家で評判の高かった安岡章太郎の作品を読み、特別な感銘を受けた。その時、将来留学する機会に恵まれたならば、安岡章太郎をテーマに研究してみたいと思った。平成四年四月、自分の留学という宿願がかない、長年の夢であった安岡章太郎の研究をはじめたのである。

安岡章太郎はその大部分を昭和の年号の中で生きている。日本にとって、昭和前半という時代は恐ろしく混乱した時代であった。その複雑に転変する時代を自分の感覚で受けとめ、歴史化した、それが安岡章太郎の作品である。安岡章太郎は私小説作家の一人とよくいわれるが、それは決して自分自身の正確な復元ではない。自分の体験を通してそれを一つの真実に高めている。それは歴史の真実といってもいいかも知れない。

なぜ研究課題を戦後の日本にしたかというと、一つは昭和という時代は日本にとっても中国にとっても中日関係を考える上で、忘れがたい時代であるからだ。中日関係の歴史を正確に認識し、それをふまえて中日両国の橋渡しの一端を担いたいと考えているからだ。安岡は、戦後とは一体なんだろうと追求してきた。安岡文学は日本人の心の構造を深く且つ広く、戦後という時代の中で捉えたものだと思うからである。もう一つは中国では日本の戦後を研究している人は少なくはないが、現役作家

を研究課題にしている人は少ない。せっかく日本へ留学にきているから、それを生かし、安岡章太郎の研究を通して戦後の日本社会など、広い分野にわたり、十分に知的栄養を吸収し、新しい分野を開拓していこうと考えている。

研究の視角をなぜ文学と政治の関係に置いたということについても、いままで自分の実体験と密接な関連があるといえる。私は、中国の文化大革命の直前に生まれ、文革の中に青少年期を迎えた。確かに文革が文学などの学問芸術を利用した政治革命であることはいうまでもない。その中に、政治がいかに文学を恣意的に利用し、学問の自律性を犯したかということはこの身で強く感じ、憤慨したこともあった。そのため政治に強い不信感を抱き、政治から逃避してきてしまった。たまたま修士論文を書くときに、「政治的関心の欠如」という安岡らの「第三の新人」への批判を読み、はたしてそうであるかという疑いを抱き、確かめてみたい気持で博士課程に入り、研究に取りかかってきたのである。

安岡章太郎についての本格的な研究はまだ始まっていない。そのもっとも大きな理由はやはり安岡の時代が終わっていないということである。安岡研究において最初に触れなければならないのは、「第三の新人」という呼称である。これをはじめて使ったのは山本健吉であり、「第三の新人」(1)という論文がその契機をなした。直接には臼井吉見の「第二の新人」(2)を受けたものであると思う。なぜ「第三」なのかといえば、戦後の文壇に登場した作家の中で、埴谷雄高、野間宏、椎名麟三、梅崎春生、中村真一郎らを第一次戦後派とすると、「第二の新人」＝第二次戦後派に属する作家には武田泰淳、島尾敏雄、安部公房、堀田善衛らが考えられるからである。その後「第三の新人」という言い方は

文壇で周知のところとなった。それを受けて、彼らと同時代の批評家服部達は、「新世代の作家たち」(3)および「劣等生・小不具者・そして市民」(4)の二つの論文で、「第三の新人」を定義し、さらにそれぞれの作家に論じた。その中でもっとも中心的に論じられているのは安岡章太郎である。それは安岡についての最初の研究論といっていいかもしれない。服部達の論点はその後長い間、安岡章太郎らのいわゆる「第三の新人」たちを論ずる枠となったのであり、政治性、思想性がない、私小説的であるという見方は昭和三十年代から盛んに使われ、その後においても先入観として多くの人に影響を与えた。本論文の出発点もそれへの懐疑、反発にある。そのほかに、いままでの安岡研究は、私小説作家としての研究が大半である。しかし、安岡のいままでの文学創作活動を見ると、そうばかりとはいえず、むしろ、初期は私小説風な創作方法が多少あるかもしれないが、その後しばらくしてそれを越えて、普遍的テーマの文学、さらに批評文学へと発展していくのである。私小説とは作者が自分の生活体験を叙述しながら、その間の心境を披瀝していく作品のことであるが、それはただ作者自身の私生活で、時代、社会、政治と関係がないということになるのであろうが、一般に私小説作家とされているとしても、安岡の作品をそうしたものとしてだけ捉えてよいのかという問題がある。それに対して、再検討する必要があるのではないかと思われる。

政治とは何か。『比較政治思想史講義』(5)によれば、「ある目的を達成する場合に、暴力的手段から平和的な説得に至るまでの手段がある。そうした手段を用いて目的を達成する過程を政治という。思想とは心が思うことであり、政治思想とは、政治について心が思うことである。政治とは、むろん多くの人間から

成る社会の中で成立するから、政治思想には、社会を構成している人間個人についての考え方と、この人間個人が相互に結びあって作り上げる国家についての考え方が含まれているはずである」。政治意識とは『広辞苑』によれば、政治一般または特定の政治問題に対してもっている見方・考え方・態度の総称である。政治的無関心とは政治に関心を示さない状態だが、消極的な傍観者的無関心のほかに、政治への批判や抵抗を含む屈折した無関心もある。政治はいろいろな事件を通して表してくる。また同じ見方を持っている人々が党派を結んでいることも多い。いわゆる政党政治というのである。安岡はもちろんそういう政党とは無縁であるといえる。しかし、政治に関心がないという意見にはとうてい首肯しかねる。本論文は、いままでの私小説の枠を越えて、安岡文学と思想という前例の見られない角度から、安岡章太郎を研究していこうという狙いで展開する。本論文は安岡章太郎の以下の作品を中心に展開していきたい。

昭和二十八年『陰気な愉しみ』『悪い仲間』

昭和三十一年五月『遁走』
昭和三十四年十一月『海辺の光景』
昭和三十七年二月『アメリカ感情旅行』
昭和四十三年十一月『志賀直哉私論』
昭和四十八年九月～四十九年二月『私説聊斎志異』
昭和五十一年～五十六年十二月『流離譚』
昭和五十二年『差別その根源を問う』上、下
昭和五十九年『僕の昭和史』

これらの作品のほとんどは、それぞれの時代を生きた作者の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人生そのものである。それが時代を見つめる目として評価され、受賞に至った。以上、論文のために選定した作品は『アメリカ感情旅行』以下長編作品が多い。作家全部の作品までには及ばなかったが、作者の多くの対談、エッセイをも参考にしながら本論を展開していくつもりである。本論文は安岡章太郎の家系を先頭に、安岡の初期創作、アメリカ体験、文学批評などをテーマに論じていきたい。それらの追求を通して、いままでと違う安岡像を描きたい。

注、使用テキスト、参考文献は各章ごとにする。

注

(1)『文学界』昭和二十八年一月
(2)『文学界』昭和二十七年一月
(3)『近代文学』昭和二十九年一月
(4)『文学界』昭和三十年九月
(5)岩間一雄著『比較政治思想史講義』十三頁
大学教育出版　一九九七年五月十日第一刷

第一章　『郷士』の視点

——安岡章太郎『流離譚』の世界

安岡章太郎の『流離譚』(上、下)は昭和五十六年十二月十五日に新潮社によって発行された。これまで安岡章太郎は、『遁走』『海辺の光景』『花祭』『幕が下りてから』『月は東に』などの小説を書いている。このいずれも作者の私的な体験をもとにして、作者自身にほぼ等しい主人公の視点から周囲を照らし出した小説であった。その意味からすると、『流離譚』の世界はいままでと違って、時代的にも空間的にも拡大し、登場人物も作者自身ではない。この作品の中では、作者は幕末から維新、そして明治にかけての安岡家の人々の生涯、土佐藩の歴史、維新史、等等大量の史料を用いて、広大な場面を描いている。一見、これまでの安岡章太郎の作品と質的に違ったように見えるが、そうではない。安岡章太郎は断固として「私」を描き続けている。というより「私」を探り続けている。その「私」が広がった、広い意味での「私」を探り捉えることができたのだと思う。その「私」を探り続ける中で、作家としての安岡章太郎はそれらの歴史的事実を一体どのような目で見ているのだろうか。それらの歴史的事実は、当然一つの政治的事件であり、強度に政治的意味を持つものである。したがって、それらの歴史的事実への見方は、ある政治的な意味をもつ可能性がある。本章は、『流離譚』の世界を、単に文学的な意味において、解明しようとするものではない。

その世界の中に含意されている政治思想史的な意味を解明することをも目指している。文学そのものから離れた地点での観察によって、文学は他の分野に対して一つの材料を提供する可能性を持ち、そのため文学の意味が、いっそう解明される場合がある。私が目指しているのは、安岡文学の研究を通じて、安岡文学の特質を解明するということである。

「第三の新人」として文壇にデビューした安岡章太郎は、「政治的関心の欠如」(1)を、その際だった特徴として同時代の評論家服部達によって指摘された。しかし、その後の安岡章太郎の文学活動や文壇外での社会的諸活動を見ると、安岡章太郎を「政治的関心の欠如」と断定するのは、早計であると思われる(2)。「政治的関心の欠如」という批判は、安岡文学の中にある政治的スタンスの特質を語る言葉であるが、安岡本人の非政治的性格を語るものでない。安岡文学の中にあるいわば政治的スタンスの特質を語る言葉であったと見るべきだと考える。本章は、安岡章太郎の『流離譚』を材料にして、明治維新に対する安岡独自の見方を検討しつつ、安岡文学を貫流する独特の政治的視点を解明することを課題としている。

一

『流離譚』は、「私の親戚に一軒だけ東北弁の家がある」という奇妙な味わいの語り口で始まっている。その東北弁の親戚(安岡正光)が、「あの戦争中」に突然たずねてきたときの体験からはじめている。それによれば、この親戚の口調が全体としては東北訛りになっているにもかかわらず、「やすをか」という姓のみは「『や』にアクセントを置いた土佐訛りで発音した」、というの

である。そのときに、安岡章太郎は「寒流のなかに暖流が流れこんできたときのやうに、生温いもので全身を包まれる気がした」そうである。

しかし、そのときの体験を、安岡氏は戦後三十数年後のいまになって、突然のように思い出した。これはなぜか。「年齢のせゐかも知れない」。そうだと考えれば、『流離譚』を書くときの安岡章太郎の年齢が、戦争中の安岡正光(東北弁の親戚)の年齢になっていることに気づいた。かくして安岡は、その戦争中の安岡正光の「年齢」による衝動と、現在の自分の衝動とを重ね合わせて、次のように推理してみるのである。

> 安岡といふ姓は、土佐にはヤタラに多い。また中国、九州などにも若干はあるやうだ。しかし東北地方には、おそらく絶無といつていいくらゐだらう。その珍しい姓を土佐訛りで名乗りながら正光氏は、何思はず五十年ほどの人生を生きてきて或る日、突然、自分のまわりに自分と同姓の人間がゐないことに気がつく、そして自分が周囲の誰とも似てをらず、生涯誰からも理解されずにをはりそうだといふやうな予感をふと抱く、そこへたまたま秀彦伯父に出遇つたことから、急に自分と同じ姓を名乗る親戚の家を一軒一軒、訪ねてまはりたいやうな気持になる、これは、ありさうなことだ。といふより、じつは私自身、何年かまへから、さういふ欲求を時折、衝動的に感じるやうになつてゐる。(3)

安岡章太郎がここで言おうとしていることは、かつてその東北弁の親戚(正光)がそうだったように、現在の自分が「急に自分と同じ姓を名乗る親戚の家を一軒一軒、訪ねてまはりたいやう

な気持」になっている、そういう衝動が戦後三十数年の時間の経過と共にじょじょに強くなった、ということにほかならないだろう。

そして安岡章太郎は、こういった衝動がある意味では「年齢」に関わりを持っている、と推理するのである。つまり、人間は五十年ほど生きてくると、自分の所有する時間に限りが予感される、そこで、家系とか血縁といったものに想いをめぐらせたくなるのではないか、というのである。安岡章太郎は自分の心理をこう推理しつつ、安岡家のルーツ探しにはいっていくのである。このことは『流離譚』のモチーフとなっており、次の話からもわかるように底流にはまさに血縁に対する深い思いが流れていたのであろう。

安岡章太郎は『読売新聞』一九八二年一月十八日付の「インタビュー」(白石省吾記者)の中で、次のように語っている。「自分がなくなるということの怖さ、何故自分はここに存在するかという悩み、これはなかった。なぜかというと家系というものを深く信じていたからです。ぼくばかりでなく日本人全体がそうだと思う」と。こういった安岡の発言は、その「家系」に大きく依拠した『流離譚』を書いたことから帰納的に考えれば、なるほどと了解できるだろう。(4)

二

周知の通り、関ヶ原合戦によって、徳川家康の覇権が確立した。それによって土佐では長曽我部盛親が全領土を没収された。新国主として山内一豊が土佐を支配するようになった。徳川幕藩体制のなかで、士、農、工、商という階級制度が厳格に決め

られていた。また、同じ身分の中でも、家柄によって細かく区分をされており、そのため、すべての人々が、身分・職業・居住地を固定され、社会的な上下関係に組み込まれた。身分制度には、民衆を分裂させて支配するという政治上での役割があった。支配階級に属している武士は当時の全人口の10%にも満たなかったが、他の身分に対する支配者として大きな権力を持っていた。しかし武士も将軍から下は足軽にいたるまで多くの身分に分けられていた。当時の土佐国では、戦国時代から長曽我部によって独特の農兵制度すなわち一領具足が行われていた。つまり他の地域では兵農分離の制度であるのに対して、土佐では兵農未分離の制度をとっていた。他の藩では旧臣は敗退したときに、自分の臣下を連れていくのが普通であったが、土佐では一領具足の農兵であったため、それはできなかった。このような軍隊は専門的な武士集団との正規の合戦には脆かったが、民衆の中に溶けこんだゲリラ戦になると、根強い抵抗力を示したはずである。それで、新国主の山内は土佐入国のときに大変苦労した。山内は土佐入国に際して新規の家来を上方以東で募集し、一切長曽我部の遺臣を採用しなかった。それどころか、徹底的な身分差別制度を導入した。前封地遠州掛川から連れてきた山内家中の侍、掛川衆(上士)と、地元の一領具足(下士)との間に、厳しい差別をしいた。長曽我部の遺臣には郷士として農地開発を強制した。郷士というのは郷村に居住し、農業に携わりながら武士の待遇を受けられる制度であるが、その実は士籍のない最下層の、武士か農民か区別がつかないような階級と同様の身分へおとしめたのである。

山内氏の一領具足懐柔策がやうやく效を奏しはじめたの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com